

広報わかさ

Public-relations Wakasa

7

蛍乱舞 2008
No. 39

日本男子バレー北京五輪出場決定！

若狭町出身 荻野正二主将 努力でつかんだ 北京への切符

若狭町出身で全日本男子バレーの主将、荻野正二選手の北京五輪出場が決定しました。

5月17日から始まった北京五輪最終予選。荻野選手は自らも出場したバルセロナ五輪以来4大会ぶりの五輪出場を、代表チームの主将として大会に挑みました。

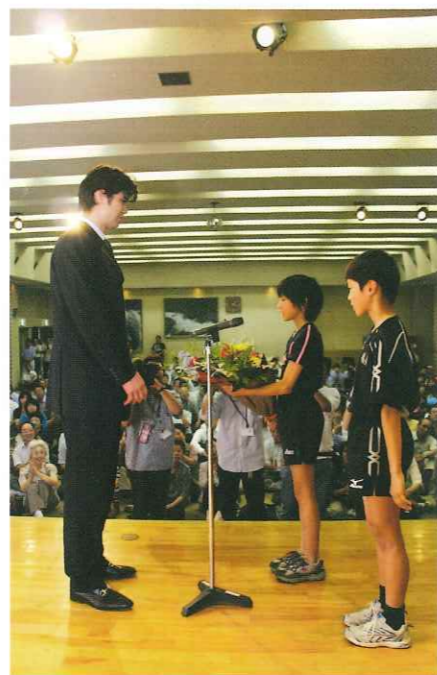
チーム最年長 38歳の荻野選手は、代表選手の中でただ1人五輪を経験している選手。監督やチームメイトからの信頼は厚く、五輪最終予選でもピンチになると幾度もコートに送り込まれ、気迫と安定したプレーで流れを日本に呼び戻しました。

6月7日、勝てば16年ぶりの五輪出場が決まる試合は、最

終セットまでもつれた末、16年間の悔しい思いや北京五輪出場への強い思いを込めて振り放った荻野選手の渾身のスパイクでゲームセット。その瞬間、日本男子バレーの北京五輪出場が決定し日本中が歓喜しました。

植田監督や選手が抱き合い喜び合う中で、ひときわ号泣する荻野選手。

選手たちは、植田監督を胸上げると、次に五輪出場の立役者荻野選手を胸上げ。荻野選手は胸上げされながら人差し指を天井に向かってつきあげました。その指先には、五輪出場権獲得と荻野選手のバレー人生の思いがたくさん詰まっていた。



荻野選手に花束を贈呈

荻野選手を激励

北京五輪出場決定の興奮が冷めやらない6月17日、荻野選手の激励会が三方公民館で開催され、住民・関係者ら約250人が集まりました。

激励会では、千田町長と清水宏議会議長が激励の言葉を贈り、上中バレースポーツ少年団男子主将の東真圭くんが「最終予選で最後まであきらめない荻野選手を見て、自分たちも試合であきらめず、全国大会出場を目指して頑張ります。荻野選手も日本中の力を背に北京五輪でも頑張ってください」と激励の言葉を贈り同女子主将の野頭愛実さんが、花束を贈りました。

荻野選手は「メダルを目指して頑

北京でも活躍を！

切符



北京五輪で活躍を誓う荻野選手

張りたい」と答え、北京五輪でのさらなる活躍を誓いました。

また、この日、荻野選手は母校瓜生小学校を訪問。

会場となった体育館には、北京五輪出場を祝う児童手作りの横断幕が掲げられ、荻野選手は「横断幕を見て涙が出るくらいうれしかった。バレーを続けていて本当に良かった」と話すと、児童からは組み体操などでエールが送られ、全児童が心を込めて書いたというメッセージ入りの日の丸が手渡されました。

最後に、全児童が荻野選手も懐かしの校歌を熱唱。荻野選手は児童たちの熱いエールに応え、北京での活躍を誓っていました。

荻野選手に聞きました interview

北京五輪出場を決めた感想をお願いします。

バルセロナから16年経ちました。その間五輪に出場できなかったのは僕らの世代の責任。この年齢で出場できて、最高の喜びです。

主将として、選手たちにどのようなことを声掛けられましたか？

自分たちが今までやってきたことを出し切る。結果は必ず後からついてくる。自分たちの力を信じて頑張ろうと話しました。

北京五輪出場を先ず誰に報告されましたか？

妻に「ありがとう」と伝えました。アトランタ五輪に出場できず、妻には辛い思いをさせてしまったから。今回決められて報われました。

マスクに大きく取り上げられていますか？

五輪に出るといことは、すばらしいことと改めて思いました。皆さんの応援のおかげです。感謝の気持ちでいっぱいです。

再び全日本代表に選ばれた時の感想をお願いします。

正直、体が持たない、1年間だけ頑張ろうと思いました。

バレーボール人生の中で一番辛かったときはいつですか？

ずっと辛かったです。辞めるまで辛いと思ってます。引退するときに楽しいことが待っているんだと思っています。

辛い時に思い出すことなどはありますか？

自分が選んだ道と思って我慢してます。ケガから復活したときは関係者に恩返ししたい。北京五輪へ行くことが最大の恩返しと思ってやってきました。

若狭町にも、荻野選手をめざせと子どもたちがバレーボールに打ち込んでいますが、メッセージをお願いします。

甥の恵多君、祥多君も頑張っていると聞いています。わたしにも大変励みになります。毎日毎日頑張っていれば、夢はかないます。全国大会に出場できるように頑張ってください。

若狭町民へメッセージをお願いします。

いつも応援していただきありがとうございます。皆さんの応援が何よりも励みになります。今後とも、応援よろしく願います。

最後に、北京五輪への意気込みをお願いします。

全日本代表は今回で最後になると思います。五輪出場の幸せを噛みしめながら、1つでも多く勝ってメダルを取りにいきます。

荻野選手、感動をありがとう



荻野選手にエールを送る児童



選手たちから胸上げられる荻野選手：福井新聞社提供

荻野正二選手を

語る

荻野正二少年

荻野正二選手は、1970年1月6日若狭町瓜生で父義久さん、母フクエさんの長男として生まれました。生まれたときの体重は3,955g、身長は61cmで大柄。姉と弟の3人兄弟で、小さいころから道などで会うといつもあいさつをする優しい少年でした。

瓜生小学校では、ソフトボールクラブのキャッチャーをつとめ、身長は友だちよりも、頭一つ大きかったそうです。荻野選手と保育所からの幼なじみで、大親友の清水寛二さん(瓜生)は「小学生のとき正二君が僕の家に遊びに来て一緒に火遊びをしてしまいました。それが家族に知れ、二人ともそれぞれの家で叱りを受けました。正二君は、家の蔵に閉じ込められ、真っ暗闇の中、出してほしい一心で漬物樽を持ち上げ、頭からかぶったという出来事がありました。それくらい、必死になると驚異的な力を発揮するのが正二君でした。正二君はやっぱり、小さい時から球技をやらせると上手でしたね」と少年時代を振り返っていました。

タイヤ引き

上中中学校に進学した荻野選手は野球部に所属。当時、野球部の監督として迎え入れた岩本守博先生は「正二君の体力はゼロに近かった。

走っても鈍足、筋肉も弱く片足で立っていることさえできなかった。そんな正二君に体力をつけてもらおうとしたことが、タイヤにロープをくくり、身体に縛って走る“タイヤ引き”でした。毎日毎日、正二君にタイヤ引きをやらせていましたね。しかし、ここで終わらないのが正二君のすごいところ。わたしが部活でタイヤを1本引くことを命令すると、彼は家へ帰って2本引いていました。2本引くことを命令すると3本引く。学校で努力して、加えて家でもそれ以上に努力していました」と話し、「正二君のそんな努力家なところが、今も、全日本でそのまま生かされていますね。彼はわたしに『練習をしないと僕はアカン』って言って絶えず練習して自分を鍛えていました」と話してくれました。



岩本守博先生

スパイクがない!

荻野選手は、日々の努力で3年生の時には、ピッチャーで4番、キャプテンとして活躍しました。そんなある日、荻野選手は岩本先生に「先生、足が痛いんですけど」と訴えると、先生は荻野選手の足を見るとビックリ。なんと、足の親指を曲げた状態でスパイクを履いていました。それもそのはず、荻野選手は中学校入学時は身長165cmくらいでしたが、中学3年生の時には190cmを超えていました。2年余りで身長が25cm以上伸びたのです。当然、足も

大きくなり、サイズは30cmにもなっていました。岩本先生は、早速スポーツ店にスパイクを注文しましたが、そんなサイズはありません。スポーツ店からメーカーに問い合わせてもらっても、特注となるため2か月かかるとの回答。それでは、練習できないと判断した岩本先生がとった行動は……、スパイクの先を切り落とすという方法でした。ピッチャーのためスパイクにカバーをかぶせるので直に指が見えることがなかったのが幸いでした。母・フクエさんも「正二の服や靴には、本当に苦労しました。中学校のジャージもほかの友だちと同じタイプのものはなく、結局手に入ったサイズは微妙に色が違うものでした」と話していました。

バレーボールの道へ

野球部を引退した中学3年生の夏、荻野選手は進路に迷っていました。「本人は野球をやりたいかみたいですが、野球での活躍は難しいと考えていました。正二君の身長を生かせるのはバレーボールかバスケットとっていましたね」と話すのは、中学1年生から3年生までの担任だった小野浩亨先生(おおい町)。こう判断した小野先生は、自身のバレーボール競技を通じて知り合った福井高校バレーボール部の堀豊監督(現総監督)に荻野選手を紹介。荻野選手はバレーボールの道へ進むこととなりました。しかし、荻野選手は本格的なバレーボールの経験はありません。荻野選手が清水さんの家を訪れ「福井に行ってバレーをする」と言った時を振り返り、清水さんは「まさかと思いましたよ。野球の道の話も聞いていたし、正直大丈夫かと思いましたよ。だって、バレーボールを今までやって来たわけでもなく……。でも、よくよく考えるとそんな心配は必要なかったですね。正二君



清水寛二さん

は、小さいときから決してあきらめる人ではなかったから。特に、スポーツに関してはひたむきさがありましたからね」と話してくれました。

荻野選手は、バレーボールの道に進むことを決めてからは、小野先生からバレーの基礎を学び、卒業まで毎日毎日練習に励みました。

そして卒業。「上中のおっさんバレーに戻ってくるわ」と話し卒業する荻野選手に、岩本先生は「どうせやるならオリンピック選手になってこい!その時には、先生町中を逆立ちして歩いたるわ!」と送り出したそうです。先生は「まさか、ほんまにオリンピック行くとは思わなかった。1回ならまだしも、2回も」と笑顔で話してくれました。

タイヤから壁へ

福井高校へ進学し、バレーボールに本格的に取り組んだ荻野選手。県内でも名門の福井高校には、小学校、中学校でバレーボールを経験している選手の中、バレーボール未経験者の荻野選手は人の何倍も努力しました。高校では休日もひたすら壁に向かってボールを打ちつけ、コートでは堀監督の厳しい練習に耐えていました。そして、荻野選手はレギュラーの座を獲得。高校3年生の時には、その努力と非凡な才能が見出され、高校生ではただ1人、全日本のジュニアチームに選抜されました。

た。清水さんは「正二君がレギュラーを獲得し、全日本にまで選ばれるようになったのは、正二君の『もうバレーしかない』という強い気持ちがあったからでしょう。正二君は、私立高校へ進ませてくれた親への感謝の気持ちをいつも持ち、心配かけないようにバレーに打ち込んでいたね」と教えてくれました。

バルセロナへ

1988年、福井高校を卒業した荻野選手はサントリー株式会社に入社。ミュンヘン五輪金メダリストの大古監督の指導のもと、翌年には全日本入り。そして、ついにバルセロナ五輪への出場を果たしました。小野先生は「正二君は堀監督、大古監督という素晴らしい指導者に会えたことが大きかった。そして何よりも、2人の厳しい練習に耐え、認められ、五輪の座を掴みとった正二君が誰よりもスゴイ!」と絶賛していました。



小野浩亨先生

選手生命の危機

バルセロナ五輪では、6位入賞に貢献した荻野選手。1998年、荻野選手は両ひざの半月板を損傷、手術し選手生命を脅かされました。岩本先生は「正直、もう駄目かと思いましたね。しかし『あきらめるな!』と電話をかけました」と話すとおろ、荻野選手は持ち前の不屈な精神力で約1年のリハビリで見事復活を果たしました。

まさか……

2005年、植田監督就任とともに荻野選手は再び全日本のユニフォームに袖を通すことになりました。選手としてだけでなく荻野選手の人間性を買われての召集でした。小野先生は「驚異的だと思いましたね。35歳でジャンプ力が伸びたと聞いていた。信じられませんか」と話してくれました。荻野選手は植田ジャパンで主将を務め、自らの練習態度でもって若手選手を引っ張りました。

北京五輪へ

そして向かえた北京五輪最終予選。荻野選手は日本がピンチに立たされると幾度もコートへ。逆境に強い精神力、あきらめないという気持ちは小さいころから影で人一倍努力して這い上がる荻野選手を知る3人は胸からこみ上げるものを感じていました。母・フクエさんは「主将としての重責を果たして、ほっとしました」と主将の大役を果たした息子をねぎらい、五輪出場喜びました。

勝利の翌朝、自宅に荻野選手から五輪出場の電話が入りました。

「よく頑張った。体大丈夫か?」
38歳、体が潰れるまでやり通した荻野選手の体を気遣ったのは、父・義久さんでした。

荻野正二選手後援会発足

北京五輪出場を決めた荻野選手の後援会では会員を募集しています。

多くの皆様のご加入をお願いします。

●問い合わせ

荻野正二選手後援会事務局
(若狭町教育委員会事務局内)
TEL0770-45-2222

荻野選手
北京でも頑張ってください!
ぼくたち、わたしたちも
荻野選手めざして
頑張ります!

上中バレースポ少男子



東 真圭主将 (野小6年)

北京でも思いっきりバレーしてください。僕も頑張ってバレーを続けます!

荻野選手はキャプテンでかっこいいです。北京でもがんばってください。

上中バレースポ少男子



佐々木輝くん (三小3年)

上中バレースポ少女子



野頭愛実主将 (三小6年)

これからも全国にバレーの楽しさを伝えてください。北京でメダルを取ってきてください。

五輪出場が決定したとき大喜びしました。北京でも頑張ってきてください。

上中バレースポ少女子



荻野充稀さん (瓜小4年)



5月17日は、熊川宿や瓜割の滝などを巡る「若狭鯖街道」コース。10・20・40km最初のチェックポイントとなる円成寺(岩屋)では「みかえりの松」のあまりの大きさに驚き、本当に見返る参加者もいました。

自然と歴史、食に堪能した1日となりました。
5月18日は、三方五湖周辺を歩く「五湖一周・ふれあいの道」コース。青空のもと、風光明媚な三方五湖周辺で、新緑の香り、爽やかな風を楽しみました。

熊川宿に到着すると、熊川女性グループによる「長操汁」がふるまわれ、参加者らは口々に「おいしい!」と話し、中にはおかわりをする人もいました。
その後、40kmの参加者は、瓜割の滝でくずまんじゅうを、下吉田では冬水田んぼで作ったお米のおにぎりの振るまいを受け、

5kmコースは、縄文口マンパークまで歩くコース。中にはベビーカーで参加する赤ちゃんもいました。完歩後「疲れを忘れるくらい景色がきれいだった。来年もぜひ来たい」と話す参加者もいました。

5,975人 観歩 完歩 歓歩

5月17日、18日の2日間、第17回若狭・三方五湖ツデーマーチが三方グラウンドを主会場に行われ、町内をはじめ、北は北海道から南は沖縄まで全国各地から5,975人が参加しました。

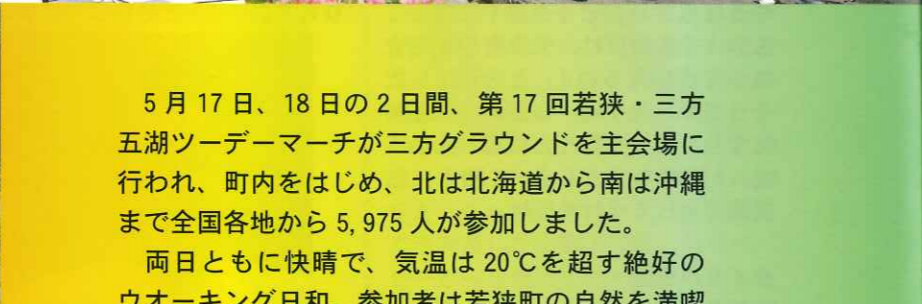
両日ともに快晴で、気温は20℃を超す絶好のウォーキング日和。参加者は若狭町の自然を満喫しながらゴールを目指しました。

若狭・三方五湖ツデーマーチは日本マーチングリーグに登録されている大会で、登録されている大会の中でも、特に自然景観がすばらしく、ウォーキング愛好家から好評を得ています。

参加者は、ウォーキング愛好家や友達グループ、親子連れなどで、日常の話題などの話に花を咲かせながら、笑顔いっぱいウォーキングを楽しみました。

第17回若狭・三方五湖 ツデーマーチ

5月17・18日





▲完歩を喜ぶ愛音くん(右)、佳音梨ちゃん(中央)、和音くん(左)と母・千恵さん

小学2年生 20km、40 km完歩！

福知山市から参加の平野愛音くん(8歳)は1日目20km、2日目40kmを完歩。愛音くんは、各地の大会に参加し、現在まで約700kmを完歩しています。

愛音くんの妹・佳音梨ちゃん(5歳)、弟・和音くん(4歳)も2日目の20kmを見事完歩し、参加者やスタッフを驚かせていました。



▲愛音くんのリュックに付けられた各地の大会バッジ



今年は40kmに挑戦しました！

昨年、20kmを完歩して、今年は40kmに挑戦、見事完歩したのは須磨航くん(気山・気山小5年)。航くんの挑戦に付き添った母・康子さんは、疲れた表情を浮かべながらも航くんの成長を喜んでいました。

40kmを歩きぬいた航くんと母・康子さん



よくがんばりました！

井口祥士くん(白屋・みそみ小5年)は父・秀明さん、母・ますみさんと20kmに参加。

ますみさんは「心地よい風が吹いて気持ちよかったです。よくがんばって完歩してくれました」と祥士くんのがんばりを喜んでいました。

「完歩証」を見せてくれた祥士くんと、父・秀明さん、母・ますみさん



完歩したぞー！

金倉里空くん(気山・気山小2年)は、友達の兼康 寿くん(気山・気山小6)、姉・里音ちゃん(気山小4年)、父・建一さんと20kmに参加。「疲れた」と話すも、元気いっぱいの表情で完歩証を見せてくれました。

右から里空くん、寿くん、里音ちゃん、建一さん



右から三宅くん、松宮くん、谷川くん、田辺くん

想像以上にしんどかったです

昨年、40kmを完歩した三宅潤くん(朝霧・上中中1年)に誘われて参加したという同級生、松宮敬宏くん(上吉田)と谷川泰亮くん(せせらぎ)、田辺 武くん(下夕中)。4人は疲れた表情を見せながらも笑顔でゴールしていました。



足立さん(右)と八手赤さん(左)

2日間40km完歩。歩いていることを忘れました

足立剛さん(豊田市)は、初めての参加で、2日も40kmを完歩。「歩いていることを忘れてしまうほど景色がきれいでした」と話していました。

同じく2日も40kmを完歩した八手赤洋和さん(愛知県春日町)は「湖岸が特にきれいでした。また来年も参加します」と来年の参加を約束していました。



金メダル賞を受賞した田辺さん

金メダル賞受賞

田辺柳子さん(越前市)は今大会の参加で、日本マーチングリーグの公式大会を見事30回完歩し、金メダル賞を受賞しました。田辺さんは「若狭町のコースは何と言っても景色。全国の人とお友達になれるのがツアーデーマーチの魅力です」と話してくれました。

Tomohiro Murayama



Yasuyuki Nakamura



Kiyoshi Yoshida



若狭・三方五湖ツーデーマーチは全国に誇れる大会です！

若狭・三方五湖ツーデーマーチは1992年「若狭・日本海ビューデーマーチ」としてスタートしました。この大会を企画し、いつかこの大会を全国区の大会「日本マーチングリーグ(JML)」の加盟大会にしようと尽力したのが、当時福井県歩け歩け協会を設立した中村保之さん(福井市)と協会のメンバーで若狭・三方五湖歩こう会を設立した吉田清さん(能登野)でした。

JMLの公式大会に認定されると、コースの価値が高まり、全国からウォーキング愛好家が訪れます。JMLへの加盟には、厳粛な大会運営基準をクリアして、理事会で認定を受けなければなりません。2人は何とかJMLへ加盟できるように、各大会で行われる理事会でのお願いやPR、大会づくりの日々が始まりました。

「北海道から沖縄まで、全国の大会へまわってお願いに行きました。今では考えられないこと

です」と話すのは吉田さん。「時には車中泊をしたり、お願いに行った仲間とけんかしたり...、いろいろありましたよ」と当時の苦労を思い出していました。

一方、中村さんは「コースの設定には四苦八苦しました。雪が積もった林道の下見などは雪崩の心配をしながら、雪を掻き分けながら歩きました。そんな苦労の甲斐があって、素晴らしいコースを設定することができました」と話していました。

そして1995年、二人と地元ウォーキング仲間の努力で若狭・三方五湖ツーデーマーチが晴れてJMLの12番目の公式大会に認定されました。認定後は毎年5,000人を超すウォーカーで大会は盛り上がり、第12回大会(2003年)には7,470人と過去最高の参加者となりました。ウォーカーの間では「自然豊かで、爽快なコース」などと好評で、まさに全国に誇れる大会へと成長していきました。

ボランティアの皆さんで成り立ってます

大会の運営には、ボランティアとして多くの方々にご協力いただきました。また、コースの草刈作業やゴミ拾いなどの美化作業についてもお世話になりました。大会が無事行えたのも皆さんの絶大なご協力のおかげです。ありがとうございました。



▲三方レイカーズによるゴミ拾い ▲明倫小児童によるゴミ拾い

わかさあじさいマラソン スタート地点

第4回わかさあじさいマラソン



6月1日、「第4回わかさあじさいマラソン」が野木小学校グラウンドで行われ、町内をはじめ全国から約1900人のランナーが参加し、快晴の若狭路を駆け抜けました。

大会は、2km、3km、5km、10km、ハーフの5コース、15部門で行われ、日本陸上競技連盟の公認コースということもあって、年々参加者が増加。高知県や長野県など遠方からの参加や、全国レベルのランナーの参加など、大会のレベルは年々上昇しています。

ランナーたちは、会場に到着するとストレッチやジョギングでウォーミングアップを行い、スタートを待っていました。

そしていよいよスタート。号砲が鳴らされると、ランナーたちは勢いよくコースに飛び出し、沿道では家族や住民たちが「頑張れ!」と大きな声援を送っていました。ランナーたちは沿道からの声援にも助けられ次々とゴール。中には仲間たちと手をつないでゴールするグループもありました。ゴール後は豚汁を参加者全員にふるまい、ランナーたちは「おいしい!」と感激しながら、疲れを癒していました。

走れ わかさ路 ひるがれ未来!



2km50歳以上男子:2位
常田清和さん(藤井)
3km一般女子:6位
常田紀代美さん(藤井)

ご夫婦揃っての入賞。「日ごろも2人でジョギングを楽しんでいます」



5km39歳以下男子:3位
中村勝則さん(横渡)
5km39歳以下男子:5位
藤本良晴さん(南前川)

美方高校駅伝部の先輩後輩。「早い選手の参加が増えて、年々大会のレベルが上がっています。もちろん、来年も参加して表彰台を目指します」



3km中学女子:5位
片山絵理奈さん(上中中3年)

「ソフトボール部で頑張ってます。小さいころから長距離走は得意。学校では常に1位です。」



3km一般女子:4位
松岡由花さん(若王子)

「大学でソフトボール部に所属しています。母からの連絡で大会に参加しました。今日は気持ち良く走れました。」



5km中学男子:5位
杉田輝くん(上中中2年)
5km中学男子:6位
武田一徹くん(上中中3年)

サッカー部の先輩後輩で、同タイムでのゴール。「みんなの応援で頑張れました」



ハーフ一般男子:1位
南部恭一さん(神戸市)

ハーフ男子の大会記録を2分も更新。「福井は景色などいい印象があるので参加しました。コースは適度なアップダウンで走りやすかったです。暑ささえなければ、もっと良いタイムが出せたと思います」



ハーフ一般女子:1位
坂根充紀栄さん(舞鶴市)

「今日は調子が悪く、タイムも伸びなかったですが、1位をとることができました。この大会はキロ表示が細かく走りやすいです」



大会冊子デザイン
田中愛梨さん(上中中2年)

今年の大会冊子デザインは、初めて町内から選ばれました。「ランナーが頑張って走ってもらえるように力強いデザインにしました」

